

# 清 末 文 学 一 隅

澤 田 瑞 穂

## 蔣劍人撰ジャンヌ・ダルク伝

清・王韜の随筆『甕廬余談』巻2に見え  
る「法国奇女子伝」はジャンヌ・ダルクの略  
伝である。逸史氏（王韜）の附記によると、  
これは蔣劍人の撰で海外三異人伝の一、劍  
人の『嘯古堂文集』に漏れたのを王韜が筆  
を加えて成った一篇であるという。『甕廬  
余談』には光緒元年の自序があるから、蔣  
の奇女子伝の原文は咸豊か同治のころに書  
かれたものと思われる。短文ながら中国に  
紹介されたジャンヌ伝の最も早いものでは  
なからうか。

蔣劍人は名は敦復、字は超存、号は劍人、  
江蘇宝山県の人。俞曲園の『春在堂随筆』  
巻1によれば、劍人は太平天国のころ「慎  
言」「議戦」「議守」「万言書」等の諸篇を著  
わして時局を論じ、また『兵鑑』は史書中  
より兵事に関するものを集めて兵律・兵謀  
・兵機・兵戒の四門に分けたものであるが、  
惜むらくは未完。また『英志』8巻はイギ  
リス王朝史を述べたものであったという。  
ジャンヌ・ダルク伝もこれらの外国書渉獵  
のうちに得た知識だったのであろう。

## 梁啓超の羅蘭夫人伝

はるの やおほろ  
春庭屋敷 先生訳述 と題する 『郎蘭夫人  
伝』は、フランス革命後に断頭台上で処刑  
されたローラン夫人の生涯を述べた 152 頁  
の小冊子である。明治19年10月、大阪の帝  
国印書会社刊行。訳者はいうまでもなく逍  
遙坪内雄蔵である。材料は主として夫人の  
自伝である “Appeal to Impartial Pos-

terity” に本づいたよしが本文中に記され  
ている。

梁啓超にも同じくローラン夫人伝がある。  
その「近世第一女傑 羅蘭夫人伝」は、逍遙訳に後  
れること20年の明治35年（光緒28年）、梁  
氏が亡命して日本で発行していた『新民叢  
報』に掲載された。材料として夫人の自伝

に拠ったことは当然であろうが、もっと手取りばやい種本として案頭に逍遙訳があったのではなからうか。

夫人と同日に処刑されたものにラマルクという老人があった。逍遙訳によると、「夫人はかゝる<sup>きは</sup>際に臨みながらも尚且惻隱のこゝろを生じて」自分が先に死ねば老人はその惨酷なるさまを見て、いかばかりおののき歎くであろうと思ひ、老人から先に処刑されよと願ったので、獄吏もその願いに任せた。

夫人は断頭機よりドウト<sup>くだ</sup>降りて老夫が両断となりたるを<sup>しれ</sup>知れども毫も<sup>せんりつ</sup>戦栗せし<sup>かたち</sup>容体もなければ。神色自若として<sup>つ</sup>平生に同じ。やをら大像の前に頭をかゝめて

嗚呼自由よ自由よ<sup>なんぢ</sup>爾の名を<sup>かり</sup>借りて刑はるゝ罪悪はそも幾何ぞや  
斯う<sup>こはだか</sup>声高に呼びながら。自若として刑台上に登りぬ。

梁啓超訳では、このクライマックスを、解説を添えて次のように叙する。

泰西通例、凡男女同時受死刑、則先女而後男。蓋免其見前戮者之惨状而戰慄也。其日有与羅蘭夫人同車来之一男子、震慄無人色。夫人憐之、乃曰「請君先就義、勿見余流血之状以苦君。」乃乞劊手一更其次第云。嗚呼、其愛義俠之心、至死不渝。有如此者。雖小節亦可以概平生矣。刀下風起血迸。一箇之頭已落。夫人以次登台。猛見台上—龐大之神像、題曰自由之神。夫人進前一揖而言曰。

嗚呼、自由自由。天下古今幾多之罪惡、仮汝之名以行。

このあたりは筆調もかなり似ている。殊に「自由よ自由よ」の名文句の訳しぶりは、ただ語順を変えただけで実はそっくりである。もっとも、全文を通読すれば、逍遙のは政治論は裏に潜ませた物語風の史伝であり、梁啓超は雄弁口調の政論で<sup>まく</sup>捲したてている。この点は両者の扱いかたの相違であるが、少くとも訳文の上では梁啓超が逍遙訳を参照しなかったとはいえないようだ。

### 三害問題の小説

『絵図花柳深情伝』4巻32回。緑意軒主人著。光緒戊申（34年、1908）上海書局石印。巻首に図像4頁。線装小型本4冊。

題名や本の体裁から推して、花柳遊治の小説もしくは春本的一种だろうと思つて、買つておいた。ところが、あとで読んでみて意外だったのは、そんな興味本位の作品ではなく、題名とは似てもつかぬ大まじめの風俗批判の小説で、実に八股・鴉片・纏足の三大弊害を戒める趣旨のものであつた。

た。

巻首の自序には本書執筆の動機と刊行に至る経緯が述べられている。それによれば、光緒乙未（21年、1895）日清戦争の後、朝野の人士が自強の論をなすようになった。時に英国の儒士<sup>フライヤー</sup>傅蘭雅（John Fryer）が、中国の自強不能なる所以として時文（八股）・鴉片・女子纏足の三弊をあげ、これを小説に書いて広く勸戒となすべきことを論じた。作者はこれを読んでいたく感動し、つ

いに2週間でこの小説を書きあげた。その後3年、丁酉（光緒23年）の春に上海で売文生活に入り、これを公刊すべく天南遯叟（王翰）に見せて正を乞うたところ、叟もまた善しと称して刊行を勧めた。その後、京津に客遊し、7月末に上海に帰って本書刊行の運びになったとある。序の末に署して「光緒丁酉重九日緑意軒主人衢州肖魯甫詹熙序於上海春江書画社」とあるから、作者緑意軒主人とは浙江衢州出身の詹熙あざなは肖魯という文士であったことがわかる。

第1回「緑意軒中思著作」に自序と同じく本書述作の由来を述べる。光緒乙未の仲夏に呉門に遊び「滬報」を読んだところ、英国儒士傅蘭雅が新しい小説の創作を待望する一文があった。それによれば、人心を感動せしめ風俗を変易するには小説に如くはなし。これを推行すれば久しからずして家喻戸曉せしめ、習気これがために一変すべし（このところ後の梁啓超の政治小説論の先声）。いま中国積弊の最も大なるものに三端あり、一に鴉片、二に時文、三に纏足。もし法を設けて更改せざれば、ついに富強の兆にあらざるべし云々。緑意軒主人これを読んで跣足嘆賞、拍案叫絶し、この三端こそ確かに時弊にあたるとなし、平生に耳聞目睹するところみなこの三者によって家財性命を喪うこと指を屈するに勝<sup>た</sup>えない。よって数事を述べて警戒勸懲に資せんとす云云とある。

物語は浙東西溪村の大族で魏隱仁という鴉片を嗜む父親に、鏡如・華如・水如・月如の4子あり、鏡如19歳は科挙に否定的、華如17歳は読書中ながら酒色に耽る。さらに一女阿蓮8歳は纏足を強いられている。

この魏一家を中心として多数の人物が登場するのであるが、煩雑だから梗概は略する。要するに八股・鴉片・纏足の三害を物語化した小説で、殊に反纏足運動の小説として時代的な意味をもつ。

賈伸『中華婦女纏足考』の附録「近今之天足運動及其沿革」には、甲午敗戦後の維新運動の一環として、光緒22年に康有為が廣州で不纏足を創立としたことから各地に天足運動が広がり、梁啓超・林琴南・張之洞らも天足を提唱したことを挙げている。また上海におけるこの運動はポットの『上海史』によればすでに光緒21年から始まっている。「纏足の弊はこれまで屢々問題とされて来たが、この年アーキボルド・リットル夫人は天足会 (Natural Foot Society) を上海に創設し、纏足廃止のため献身的努力を払って輿論の喚起につとめた」とあり、傅蘭雅氏の提唱と時を同じくしている。作者はこれに感動し、纏足ばかりでなく三害を併せて小説化したので、その運動史上の意義は認めなければならぬが、遺憾ながら題名が内容に副わず、作者の意図とは別のもになっている。これはおそらくは出版元の営業上の都合で変えられたものであろう。

けだし清末の小説出版社は、一面には時弊改良を標榜しながら、一面にはまた低俗な娯楽読物を出して手軽に営利を図ったので、風俗改良を叫ぶ堅苦しい感じの書名を忌避し、攀花折柳の歡樂を連想させるような書名で読者を釣ろうとしたのではなかったか。緑意軒主人の折角の熱意も、羊肉を売るのに却って狗頭を掲げるような浅はかな題名によって埋没させられたのは、まことに不本意なことであった。

## 日露交戦と時事歌謡

上海商務印書館発行・李伯元主編の半月刊『繡像小説』は、誌名のとおり毎号挿絵付きの小説専門誌であるが、編集上の変化をつけるため、小説のほかに論説や科学読物や歌曲類も掲載している。そのうち歌曲類は「時調唱歌」という総題で、第2期から第32期まで断続しながら合計19篇が載っている。そのうちの13篇はすでに阿英編『晚清文学叢鈔』説唱文学卷上冊に転載されているが、余の6篇は採られていない。他の集に収める予定で留保したのもあろうし、また編者の方針によって捨てたのもあろう。編者の「叙例」によれば、「本書に選んだ説唱文学は、基本上では愛国・民主・科学啓蒙運動の主題範囲のうち、できるだけ当時の政治運動のそれぞれの段階に照らして代表性をもつ作品を選出したものである。」しかも「その間に若干の思想観点上に少からぬ問題があって、たとえば狭隘なる民族主義と保皇立憲派の主張、乃至は芸術性がすぐれず、構成が不完全であるか、あるいは断片を留めるだけで舞台上の演唱に不適などの欠点もあるが、ただこれらの作品はかなり真実に時代を反映しているので、やはり選録することにした」という。すると、選録されなかった諸篇には、どんな問題点や欠点があったのか。それを窺うために、例として日露交戦（日露戦争）に関する時事歌謡3篇をあげてみよう。

破国語 悲東三省也 仿鳳 陽花 鼓調  
蓮園倚声（第10期癸卯8月15日）

説奉天，話奉天。北京唇齒正相連。一朝入了俄人手。最傷心滿城彈雨又硝烟。

長將軍，胆氣粗。辦理外交還不算糊塗。有箇無恥人辱沒了大清國。甘心情願做人奴。

庚子年，天步艱。旌旗一片早已出函関。黑龍江縱守得住咽喉路。鐵路如飛又往還。

一年內，撤兵期。俄公使言語太支離。要他密約親簽字。百般要素本不足為奇。

得消息，喫一驚。白蘭金戈自古是名城。甚麼齊齊哈爾也是囊中物。者般奉送不見主人情。

衆大員，費商量。頤和園召見往來忙。敵車贏馬婦何処。不是茶坊便是那酒坊。

占衙署，逐華官。慘目傷心不忍看。有許多士農工商遭了紅羊劫。眼看着家鄉沒有了盤纏。

紅鬍子，最猖狂。行蹤飄忽出沒又無常。楚材晉用應了前人話。對了中国兵架起後膛槍。

出榆関，士卒屯。棘門霸上猶有旧將軍。歴來兵法揣摹熟。紮了營盤終日醉昏昏。

説可憐，話可憐。眼前沒有太平年。兪祥之地那有閑情管。巍巍兩聖終朝坐在奈何天。

この篇は義和団事変後の辛丑和約締結により、他の列国は逐次撤兵したのに、ロシアは満州に兵力を集結させたまま言を左右にして撤収せず、東三省を手中に収めて、ついに日露の衝突に至る時局を鳳陽花鼓の調に託して嘆じたもの。第5節の「白蘭金戈」はおそらく「白蘭戈金」の誤植で、現

在はソ連領のブラゴベチェンスクであろう。これより西南に向えばチチハルも囊中の物である。作者は実名未詳ながら、この雑誌に『負曝閑談』を載せた蓮園と同一人であろう。

小五更 咏俄日交戦也 竹天農人倚声  
(第15期 癸卯11月1日)

一更鼓裏天。一更鼓裏天。總督夫人開壽筵。帶兵官都把馬戲看。帶兵官都把馬戲看。日本魚雷船。果然膽包天。夜半偷營打碎了鉄甲船。東洋人先勝了頭一戰。東洋人先勝了頭一戰。

二更鼓裏鏖。二更鼓裏鏖。俄日兩國大交兵。却原來為的是我東三省。却原來為的是我東三省。街坊捨命爭。主人心不驚。昏昏沈沈睡亦睡不醒。禍臨頭那時纔認了命。禍臨頭那時纔認了命。

三更鼓裏多。三更鼓裏多。可薩克的人馬實在多。日本兵倒也抵得過。日本兵倒也抵得過。漢城動干戈。日本占勝着。俄國欵差送上了火輪車。日本兵正在高麗城中坐。日本兵正在高麗城中坐。

四更鼓裏遲。四更鼓裏遲。打壞了兵船好幾隻。黃種人這纔出了氣。黃種人這纔出了氣。中國人受欺。存亡尚不知。國貧民弱總不敵。勸諸君大家要爭口氣。勸諸君大家要爭口氣。

五更鼓裏敲。五更鼓裏敲。我黃種兵威殺氣高。中國人為什麼不要好。中國人為什麼不要好。兩國把兵交。中立莫逍遙。強佔我疆土。憤氣怎能消。快齊心大家把國保。快齊心大家把國保。

ロシアの滿洲侵略には当初から憤激していたのだから、日露開戦により日本の魚雷艇が露艦を急襲したことに「東洋人先勝了

頭一戰」と喝采を送る。圧倒的なコサック兵力に対して日本軍も善戦し、漢城を占領した。われら黄種人(黄色人種)が初めてよく気を吐いたのに、中国人だけは疆土を占領されながら「中立」と称して呑気に構えている。国民諸君もっと心を一にして国を守らなければならぬと激励している。この段階では日本に対してすこぶる好意的であり、むしろ友軍のごとく見なしている。

歎国歌 五更調 蠶穹倚声

(第26期 光緒30年甲辰4月15日)

愁人对月数更籌。触起衷情淚怎收。歎我国沈酣有了千年久。醉生夢死万事一齊休。可憐俄日干戈鬪。東三省那使画鴻溝。百姓出亡官不守。只落得纍纍白骨滿荒邱。

更鼓動，一更多。無心空对月嫦娥。槍林彈雨打從庚子年間過。斜陽滿地泣銅駝。又誰知內政外交無一可。只求安穩息風波。旧地裏遼陽城外生烽火。軍歌隊隊早過了白狼河。

更鼓轉，二更來。幾人策馬立烽火台。天開劫運真無奈。北望着旅順口愁雲慘霧不曾開。礮聲一動甍隳寨。多少兒郎臥草萊。可憐你忠心一点只把皇天戴。那管他黃沙白草葬了英材。

三更鼓，月輪高。熱血斑斑染繡袍。敗的是殘魂化作紅心草。勝的是策勳歎至酌蒲桃。驚心北地秋來早。祇賸些英魂毅魄。在鴨綠江化作了滾滾波濤。

四更鼓，浪淋浪。中立淪胥出上方。不分黑白竟是一片糊塗帳。全不管前門虎与後門狼。心惘悵，意徬徨。哭只哭奉天城無辜百姓。平白地一箇箇都收入紅羊。

長嘆罷，五更殘。振刷精神難上難。做官的那裏有什麼清風和亮節。當兵的

那裏有什麼義膽与忠肝。不過是大家  
錢兒大家賺。就只一樁上生生的送了  
旧江山。我嘆罷自把淚痕和墨写。又  
只見瞳瞳朝日上闌干。

日露戦争も遼陽・旅順口・奉天会戦と進  
んで日本の勝利に終わったが、勝者も敗者も  
無数の英材をむなしく黄沙白草に葬ったと、  
いささか「弔古戦場文」の感慨である。ま  
して、うやむやに中立の立場をとった中国  
は満洲を戦場にされ、無辜の百姓は、みす  
みす世界滅亡の紅羊劫に入ったと嘆じてい  
る。愁嘆の情を抒する五更調に仿ったとい  
え、筆調はこれまでとはかなり違うよう  
だ。

日露戦争も、その主因はロシアの横暴に

あったのだが、終ってみれば所詮は帝国主  
義間の相剋で、結果的には日本も侵略国に  
なってしまったのだから、「黄色人種のため  
に気を吐いた」と喝采するのは、今から  
いえば以ってのほかということになろう。  
また現在でこそ中蘇対立・覇権反対で緊張  
が続いているが、説唱文学巻の刊行された  
1960年代では、帝政ロシアの古創を突く  
のもソ連に対して憚られたのではないか。い  
くら貴重な旧史料でも、その取捨は政治外  
交上の現実に平仄を合わせるものが要求さ  
れる中国だから、日俄交戦を主題とする歌  
謡が採録されなかったのも、おそらくその  
辺に理由があったのだろう。

(さわだ みづほ)